

# 新しいメディア時代を生きる

## 知恵と哲学

### 橋爪大三郎

Daisaburo Hasbizume

東京工業大学工学部教授。1948年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。専攻は社会学。構造主義を踏まえた言語派社会学を唱え、性、言語、権力を説明原理とした「記号空間論」の構想を展開する。無所属で執筆活動を続けた後、1989年から東京工業大学助教授に。著書は「はじめての構造主義」(講談社)「橋爪大三郎コレクションI~III」(勁草書房)「橋爪大三郎の社会学講義」(夏目書房)など多数。

### 対談

### 西 和彦

Kazubiko Nishi

株式会社アスキー取締役社長。1956年生まれ。1977年、早稲田大学理工学部機械工学科を中退し、アスキー出版を設立。同社副社長から現職に。1990年より東京工業大学講師(メディアシステム工学)、国連大学高等研究所客員教授。パソコンのソフトや半導体の開発、インターネット通信サービス、出版などの事業を手掛ける。近年は、「ピーニング・デジタル」(アスキー出版局)「ビル・ゲイツ未来を語る」(アスキー出版局)など米国の最新の情報社会論を翻訳、紹介するとともに国連大学でインターネットによる国際関係論を研究。

### インターネットを生んだ アメリカを日本は 追い越せるか

橋爪 私はコンピュータのことは分からない人間です。それでも、去年の暮れにはウインドウズ95が発売されたりして、それなりに興味を持って関連する本や記事などを少し読んでみますと、これからマルチメディアの時代

がやってくると、みんなが考えているようです。私のような門外漢でもそう思うようになったということは、国民のあいだでそれが常識となりつつあると思うのです。ただ、それがどんな時代であるかということになると、かなりあいまいである。解決すべき課題もたくさん残っているように思います。いずれにせよ社会に大きな変動が起こると予想されるのですが、今日は、その辺についてお話しいただきたい。私の方からいろいろとご質問

をさせていただくつもりです。

西 まず、少し、基本的なスタンスからお話しさせていただきます。

日本の成長は過去五十年です。その間に所得水準は世界のトップクラスになり、東京は世界で一番大きな都市になりました。では、この半世紀の日本の成長の原動力は何だったのでしょうか。これは、やはり、戦争に負けた日本の「これではいけない」という想い、「大きく強い日本をつくらう」という人々のエネルギーがプラスに出た結果ではないでしょうか。ところが、昭和が終わるころ

から、いわゆるバブルになり、ちょうど平成にもなって成長が平たく鈍化し、そういうエネルギーがなくなりつつあるように感じるんです。日本の人口も減り始めていますしね。

日本はアメリカに追いつき、あるいは追い越した部分もある。しかし、今日、アメリカには世界に冠たる情報技術が存在します。流行りのインターネットもアメリカが発明したものです。それを日本はどう追い越すのか。アメリカはどんどん先に行っている。そのインターネットを生み出した社会を本当に我々は追い越せるのだろうか。そもそも追いつけるのだろうか。その辺に関して先



橋爪大三郎氏



西 和彦氏

生はどうお考えかと、逆に私の方から伺いたいと思います。橋爪 アメリカがインターネットを構築した理由は、当然、軍事目的です。冷戦時代にソビエトの攻撃を防止して自由世界を守ろうとしました。そこで、情報戦争でも勝たなければならぬ。ICBMの弾道計算から始まったコンピュータが、軍事技術と密接に結びつきを深めながら進化を遂げた。そうして、情報戦争を勝ち抜く世界的なネットワークを構築したわけです。ところが、冷戦が終わってしまった。そうすると、このネットワークは経済システムの中で世界をリードしていく先端技術として生き残らなければ、単なる無用の長物になります。そこで、インターネットの再利用の可能性を真剣に考えようという動きになったのでしょう。また、この先端技術を維持することが、アメリカのポスト冷戦世界での戦略にもなりました。いわば民生転用ですね。

アメリカが今、マルチメディア時代だと言っているのは、半分は宣伝です。しかし、それだけでなく、やはり社会がこの方向に進むだろうという直感もあると思うんです。私もかなりそう思います。ところが日本には、世界中に情報ネットワークを張り巡らす必要もなかったし、そういう発想もなかった。また、そんなことを仮にやればアメリカからいらまれてしまう。大事な情報はアメリカからもらうんだというのが習慣でした。ですから、日本がこれを国産化しなかったのは、バイタリティーが足

とかインターネットというのが次の情報革命の一番のインボルである、それはいわば「内燃機関」に対する「情報機関」ではないかという思いがするんです。

植民地時代を考えると、まずオランダが世界中に進出し、次にイギリスが頑張った。フランスも頑張ったわけですが、その中でイギリスがインドや中国などの植民地経営に一番成功しました。同時に蒸気機関という技術のイノベーションの立ち上げにも成功したわけです。ところが、十八世紀の終わりが、そのイギリスが少し落ち目になってきて、次はフランスの時代になるかもしれないというときに、フランスは、植民地だったアメリカにそのチャンスを取られてしまったのです。私が心配しているのは、アメリカの第二ラウンドとしての情報革命のことなんです。アメリカが非常に頑張って、日本も頑張っているけれど、日本がフランスの轍を踏みはしないか。

橋爪 フランスがイノベーションに成功しなかった理由は、あまりにも立派な中央集権国家体制ができていて、そこに集く大土地所有貴族など、アンシャン・レジーム（旧体制）と呼ばれた特権層がいたからです。彼らの社会的実力はイギリスの特権層よりはるかにパワフルだったのではないのでしょうか。そんな連中が頑張っている限り、イノベーションはできません。

西 その原因は社会制度にあるのか、それとももう少し

りないという面もあったのでしょうか、その前に日本の国策として得策でないかと考えていたからではないでしょうか。それは戦前、兵器を国産化しようとしていた努力と比べると、少し違うのではないかと思います。

西 なるほど。確かにそういう面はあるでしょうね。

## 次の情報革命の 第二ラウンドに 日本の社会システムで 立ち向かえるか

西 実は、私は、今の日本について少し心配していることがあるんです。

かつてイギリスが蒸気機関をつくって、いわゆる産業革命をやりました。次に内燃機関をつくって、それがアメリカでの自動車の大量生産につながっていった。残念ながらイギリスは、蒸気機関は上手につくられたけれども内燃機関は上手につくれなかった。T型フォードに対してもイギリス人は、ああいうものはアメリカ人が乗るボロい車だとか言って、ロールスロイスをゆつくりとつくっていたわけです。

つまり、それと同じようなことが、今、また起きているのではないのでしょうか。アメリカは、第二の内燃機関として、インテルに代表されるマイクロプロセッサをつくらうとしています。私には、このマイクロプロセッサ

別のところにあるのでしょうか。例えば、新しい技術などが生まれたときに、それに投資し、株式を公開して企業として育てていくような社会システムがあるか。その辺りにも原因があったのではないのでしょうか。一つ言えることは、フランス人というのはすごく排他的だと言われています。新しいものに対して、あるいはフランス的ではないものに対してなかなか懐疑的で、リジエクトする。そういう部分が問題ではないかという感じがするんです。

では、アメリカのエネルギーはどこにあるかと言うならば、やはりニューヨークがその象徴だと思えますが、移民ですね。どんな移民が入ってくる。アメリカの成功の最大の理由は、戦争中や戦争が終わったときにユダヤ人を中心とする、ヨーロッパの人たちが大量にアメリカに移民して来たことだったと思うんです。その中に優れた人、すぐくエネルギーを持った人たちがいて、イノベーションを起こしてアメリカの社会を引っ張っていったのではないのでしょうか。

そう考えると、今のパリは捨てたものでもないんです。白いパリと黒いパリがあると言われていて、その黒いパリというのはアフリカから来た人たちのことなんだそうです。そういう人たちが新しいパリのカルチャーをつくっているんだという記事が、最近、出ていました。これはいいことだと思えます。そういう文化に対する許

容性が大事なのではないでしょうか。それを背景にして技術革新みたいなものが出てくるのだろうと思うんです。橋爪 そうですね。しかし、新しい技術を思いつく天才はどんな国にもいると思います。要はそれを押しつぶしてしまおうような力がありはしないかという点。そこが、やはり大事ではないかと思うのです。

西 社会として、ですね。

橋爪 イギリスの場合も、その繁栄を形づくった階級社会が、逆に、チャンス奪って、アメリカに次の発展を促した。

西 そうなんですよ。

橋爪 アメリカはまだ、その発展の力を秘めているのだろうと私は思っています。

## 日本の戦後は 貧しさから出発し、 世界の構想からは 出発しなかった

西 アメリカの経済は、かつてドルの交換停止という辺りから通貨インフレを起こし、そうしてドルを大量に発行し、軍事力を使ってそのドルを世界の基軸通貨に押し上げてきたわけです。その結果、アメリカの四つの赤字が生まれました。財政の赤字、貿易収支の赤字、医療制度の赤字、そして教育の赤字という四つの苦しみがそれ

です。そのアメリカが今、リストラをやって、けっこう調子がいいように見えるではないですか。

アメリカの会社、あるいは政府もそうなんですが、リストラをやるときはともかく徹底的にやる。そういうエネルギーが日本にはないのかもしれないね。今の住専の問題にしても、農協を守るために最後にだれのお金で解決しようとしているのかと言えば、実はそれが国民のお金だったりするわけです。そういうことをするから国民の元気がなくなるのではないのでしょうか。

橋爪 日本の場合で言えば、先程のお話にあった五十年の繁栄をもたらした条件がいろいろとありました。ところが、今、それが逆に次の繁栄を阻害しているのかもしれない。日本はこの五十年で、繁栄の条件を食いつぶしてしまったのではないのでしょうか。

西 この繁栄は何がつくったと思われませんか。

橋爪 行政(官庁)と大企業とが、競争のない競争経済——暗黙の、法律によらない配分と協調のシステムをつくった点だと思っています。もちろんそれに、教育とかアメリカの戦略とか、いろいろな要素が絡んできますが。

西 私は、一国の成長はSカーブを描く、しかもそれは百年で一つのサイクルを終えるものだと思っているんです。ヴェニスも百年、オランダも百年、イギリスの産業革命も百年、そしてこのままだとアメリカも百年だろうと思うんです。

しかし、日本の場合はすごくラッキーだったと思うんです。明治からの百年の成長が、実はそのSカーブの途中で挫折した。明治維新からほぼ八十年、一九四五年の敗戦によって挫折したけれど、それによってSカーブがリセットされ、もう一回ゼロからスタートできたわけです。それで、今、もう一度、Sカーブの中間に我々はい

る。でも、残念ながらというか、不幸にもというか、今は、あたかもSカーブの最後の辺りにいるようなムードになっていきます。では、必要なのは何か。これは破壊だと思えます。建設的な破壊。

橋爪 何を破壊するんですか。

西 今の日本を全部です。今、世界で一番ラッキーな国はドイツです。西ドイツは東ドイツを併合した。ブラックホールを抱え込んだわけです。あんなことをすると駄目だと言われながらもドイツはそれを断行した。あれでドイツのSカーブは少なくとも五十年分ぐらいいりセットされました。だから、今から二十一世紀に向けてドイツは必ずまた経済成長するはずですよ。

日本にはそれがない。また、アメリカみたいに移民が続々と入って来るわけでもない。インターネットで世界中がつながり、世界同時性みたいなことも起きてきている。ノウハウだけは持っているからとノンビリしていることはできなくなりました。これって結構大変なことではないかと思うのです。

だから、もう成長はないんだとまず覚悟を決めてかかる必要がある。それならば、とりあえず、今までやってきたことをリストラする。売り上げは変わらないが利益がもつと出るとか、売り上げは一〇%しか伸びないが利益が一〇〇%伸びるというようなことをしていく必要がある。

橋爪 今日のもっと元気なお話をうかがえるのかと思つて来たのですが、お先真つ暗なお話なので、少し意外な感じがしているのですが。

西 そうでもないんですよ。基本的な問題意識として、マルチメディアがどんどんすごく良くなるかと言うと、そういう部分も確かにあるでしょうが、決してそれだけではないと思うのです。

橋爪 先程、Sカーブというお話が出ましたが、もしそういう法則があるとすると、それをリセットするのは、容易ならざることですよ。

私は明治時代って好きなんです。なぜかと言うと、明治時代には文字通りの破壊が生々しい記憶として残っていました。そして、明治をつくった人たちは、それまでは土佐とか薩摩とかいろいろな国があったけれど、それはもう国ではない、これからは日本という国をつくるんだという選択をした。自分が選んで、自分が支えているという意識があったんですよ。

ところが、日本はもう一度リセットされた。一九四五





年に。しかし、そのときには残念ながら、国は選べなかった。成長の軌道は与えられたが、枠組みはすでにあった。そして、そのSカーブ通りに突き進む。そしてそろそろ、Sカーブの先が見えてしまったのか、元気がなくなってきた。そんな構図なのではないでしょうか。

結局、戦後は、貧しさから出発しました。世界の構想から出発してはいないんです。だから、貧しくなると、自動的に発展にストップがかかってしまった。

## 情報技術の 革新によって失うもの そして手に入れるもの

西 私 は、そこで、貧しさとか豊かさというのが物質的なものなのかどうか問題だと思っただけです。

橋爪 もちろんそうですね。定義の問題です。

西 貧しさとか豊かさとかというのは、物質的には相対的なものだろうという感じがします。でも、相対的ではない、絶対的な価値を持つ豊かさの世界もあるのではないかと。それは、心の世界です。

マルチメディアとかインターネットには落とし穴が山ほどあります。最近はその辺りのことをずっと考えているのでネガティブな面ばかりが見えてきてしまうというわけでもないのですが、テレ・ショッピングとか、テレビ会議とか、電子マネーとか、そういう新しくして一見便利

に見えるシステムというものが、極めて人間不在に見えるようになってきました。

例えば、ここに電子マネーのカードがあるとしますよね。このカードの中身は、テレフォン・カードなら五百円とかですが、五百万円にすることもできるわけですね。それで、五百万円を入れた電子カードと五百円を入れた電子カードがここにあったとして、実は両方とも重さは一緒なんです。お金の量が一万倍も違うのに重さは一緒だなんて本当はおかしいですよ。

そうすると人間はどうなるか。お金が多いというリアリティ、現金の重さみたいな感覚を私たちの世代はまだ分かっていきますよね。でも、いずれは生まれたときから電子マネーだったという人たちの時代になる。そのときにはもうその感覚が分からないでしょう。これですごく危ない状況だと私は思っています。だから、お金が増えたと重くなるとか厚くなるとか、そんな電子カードをつくってくれと私は言っているんです。

そういうふうに社会のいろいろな制度が、インターネットとかマルチメディアで変わってしまう。そのときに失われるいろいろなものをどう救っていくのか。人間同士が会うこととかも少なくなると思っています。会おうと思えば会えるのですが、ビジネスでも電子メールでやった方が確実だし、時間も関係ないし、とにかくいい。しかし、人間と人間のコミュニケーションはやはり希薄にな

の問題だと思えます。

しかし、技術革新は、一度この方向に進むとなったらともかく進まざるを得ないという面がある。そこでは失うものも得るものもある。だとするならば、この情報技術の革新によって一体どういうものが手に入るのかについて十分に理解している必要がある。そうした構想力がこそが問われるのではないのでしょうか。

## ネットワークは 人間に時間を与え 心の豊かさをサポート する技術になり得る

西 「ネットワークによって人間は何を手に入れるか」ということですが、私は、それは「時間」だろうと思っただけです。

橋爪 それは大事です。

西 最近考え始めたことなんです。例えばスケジュール。集計してみたら、一週間で移動時間に大体十五時間をかけている。それではまる二日間クルマに乗っているのと同じではないですか。それで、あるとき、時間を有効に使うにはどうしたらいいか、本気で考えたんです。それなら、その移動時間を最少にしようというのが私の結論でした。

例えば、今日は、一番最初にこのホテルの部屋で対談

る心配がある。情報は伝わるけれど心は通わない。そういう状況になることが怖いんです。

橋爪 おっしゃることはよく分かります。確かにいろいろなものが失われていく可能性がある。だけど、考えてみれば、産業社会が始まったときにもいろいろなものが失われました。農業が始まったときにもいろいろ失われたはずなんです。

西 そうなんです。でも、何は失って良く、何を失ってはいけないか。何が失われたときに悲しいかということなんです。物質的な豊かさを追求することは基本的に良いことかもしれない。でも、失われるものがあることは良くない。私は、それが、人間と人間の触れ合い、そういうコミュニケーションの世界なのではないかと思っただけです。

家の制度が崩壊する。日本の大家族主義はすでに崩壊しています。その結果、家族はバラバラになってしまった。そういう家庭で育ったら、子供は情緒不安定になりやすくなります。これは日本の社会の一番基本を規定する大問題です。精神的豊かさを同時に持たなければいけないと思います。

橋爪 私は、その辺はこう考えますね。まず、技術革新と心の豊かさの問題は、一応、独立の問題であると。技術革新によって心が豊かなくなることもあるし、また逆に新しい可能性が開けてくることもある。それは知恵

するスケジュールが決まったんです。それで、この日はもう前後のミーティングもすべてこのホテルでやろうと決めました。移動時間はほとんど一分以下。それってすごくいいですよ。移動時間をなくせば一週間が二日増えるんです。実際に二日は増えなくても、無駄になっていった時間にリラククスすることができれば、人間ってもっと想像的に、生産的になれますよね。いろいろなアイデアとかも出てくるでしょう。だから、そこで浮いた時間をどう使うかが、ネットワーク時代のすごく大きなテーマだと思んです。

橋爪 私もそう思います。ただ、それは、言葉を換えて言えば、これには心の豊かさをサポートする技術になる可能性があるんだということですよ。

西 そうですね。

橋爪 その時間の使い方には、例えば、家族と一緒に暮らすという選択がある。長期の休暇を取るといやり方もある。あるいは大学に戻ってもう一回勉強するという考え方もあり得る。つまり、人生の選択肢が増えるわけです。そういう技術的な可能性を開いてくれる。

だから、物事には両面あるんですよ。では、そのプラスの面をどう確実にしていくか。それには、みんながその技術を理解し、それにお金を払い、その技術を購入してその産業を大きくしていくことですね。だけど、そこがまだまだ不透明なのではないか。

## 日本の進路の 選択が問われ 一人ひとりの生き方が 問われている

西 日本は、今、まさに決断すべきところにいます。破壊し、リセットして、Sカーブを再びゼロからスタートさせるという判断をするのか、それとも……。

私は、ここで日本が取り得る選択は「長生きする方」ではないかと思っています。長生きをするために生き方を少し変える。そうしてクオリティ・オブ・ライフというか、豊かさ、心の安らぎ、そういうものを毎日得ていく。でも、万一、大地震とかが来たら違った選択になってしまうのですが……。

橋爪 確かに時間をゆったりと使うということが一番の基本だとは思いますが。しかし、企業に100%時間を支配されるのではなく、自分に時間の使い方に関する主張があり、企業もそのような勤務形態を保証するようになるためには、生産性が目に見えて伸びていくということが絶対条件になりますね。それがなくては、従来働いていた時間をカットし、しかもジョブ・シェアリングで、お年寄りなども雇用することにしようといっても難しい。それで、生産性を伸ばしていくためには、やはり企業努力。それから新しい技術がどんどん出てきて、激烈な競争があり、淘汰されるべき企業は淘汰されていって、生

それで、ある産業が大きくなるにはこんな条件があるのではないでしょうか。すでに競合する同じような商品がある場合には、性能を向上させて価格を低くすればいいんです。しかし、全く新しい機能を持つ商品の場合は、それが役に立つということを説明して人々の合意を得なくてははいけません。コンピュータだってそういうものだったろうし、マルチメディアもそういうものだろうと思います。

マルチメディアと一口で言いますが、それが一体どのような生活に波及していくかは、そのハードやソフトをつくっている当の本人たちにとって分かっていないかもしれない。だから、ここからは、だれが一番最初にそれを社会の中にもうまく組み込んでいくかです。例えば、日本の教育をマルチメディアに対応させてこう変えましょうとか、日本の企業とか官庁は今までこういうマネジメントをしていたけれどそれはこの技術でこう変えましょうとかいう提案をして、実際に社会をつくり変える。そういうことが、その産業を育てる条件ではないでしょうか。

だけど、残念ながら、日本の場合は古いシステムです。で大きな産業をつくってしまっています。だから、さきほどお話があったように破壊が必要なのです。すると、破壊の必要でない国の方が、マルチメディアは伸びてくる可能性があると思うんです。

産性の高い企業が生き残っていく。そういうシステムにしなければいけないと思います。

西 もう一つ言うと、私は、本当は東京なんかにいるのは嫌なんです。仕事上、やむを得ないのですが、できれば田舎でものんびり仕事がしたい。そのためには高速交通手段が必要です。必要なときには都会に短時間で行けるもの。でも、通信を使えば行かなくてもすむんですね。そこで余った時間やお金を生活のクオリティの向上につなげられれば大変に素晴らしいではないですか。

でも、問題は、それでもやはり、人と人との触れ合いが間違いなく減ることです。つまり、心とか、表情とかの通わないコミュニケーションの社会になってしまうのではないか。それが怖いんです。

橋爪 私は、新しいメディア社会になると、むしろ人と会いたくしようがないという思いが、今まで以上に強まるのではないかという気がするんです。

そこで私が思うのは、昔のギリシャなんです。ギリシャのポリスは、人口は極めてわずか。今で言う過疎地みたいなものでパラパラとしか人は住んでいなかった。でも、人と人が出会う密度と深度が深かったから、あれだけ活発な知性が生まれたのではないのでしょうか。ともかく人数の割には知的生産性がすごい。そういう道があり得るだろうと思うのです。

このホテルに今日のすべてのミーティングを設定されたというお話がありました。それと同じで、一年を設

計するときにも余暇時間を集中させる。それで、例えば、私はこの夏は〇〇村で三ヶ月を過ごします。あなたも一緒に行きませんかということ、その三ヶ月を充実させる。そういうふう人間は知恵を働かせていくのではないのでしょうか。

### 言語の問題を 突破口として アメリカではないという 利点を活かす

橋爪 最後に、いい機会なのでおうかがいしておきたいことがあるんです。それは、言葉の問題です。

今のところインターネットは英語がメインになっていますが、こういう状態が長く続くと私は考えられません。それでは、各国個別の言語と英語の関係はどう調整されていくのだろうか。今後数十年にわたってかなりぎくしゃくする問題ではないかと思っています。技術上の問題も政治上の問題も両方ありますからね。

西 私は、インターネットのメインの言語は、英語からローカル言語に移るといふより、むしろ融合していくのではないかと見ています。

インターネットでは、実際、英語の中にフランス語が引用されたり、ドイツ語があったり、最近ではギリシャ語やラテン語が引用されたりしているんです。だから、インターネットの未来は英語だけではないなという感じですね。

このアイデアをまねて、すべての言語が英語を副表記する。それが最終的な解決ではないかと私は思っているんです。文章を作成していく段階で、英語を副表記するソフトをつくるわけですね。

西 それについては、私はこう思います。もう英語と日本語とかやらないで、エスペラントでもいいから、とにかく文章を書きながら同時に世界共通語に直していくって、それもコンピュータに乗せる。

橋爪 世界共通語はつくれませんから、日本語の文章を打つときに、これが主語だ、これが述語だとか、そういう文法関係を付加的に明示する。

西 タグをつけるわけですね。

橋爪 ええ。タグを残すように作文してもらおう。それならどの言語にでも簡単に直せます。

西 それにはやはり、文法関係がはっきり定義されたタグを持つと同時に、一つの意味にしか翻訳できないように定義をした言葉を使うべきですね。

橋爪 そうですね。

西 例えば「ブック」という言葉には「本」という意味と「予約をする」という意味など二つ以上の意味がありますね。そこが問題で、違う意味の取り方ができるところでは機械翻訳は難しいと言われています。私は、それならば英語をベースにして、誤解されない英語をつくる方がいいのではないかと考えているんです。

がする。よく、帰国子女が英語と日本語をチャンポンで話したりしてますよね。ああいうのの多国語版です。

今、大学では、第二外国語までやりますよね。でも、インターネットの時代には、それこそ第五外国語ぐらいまでやらなければいけない。バイリンガルではなくマルチリンガル。そうならないといけないというより、そうなる面白さという感じがします。インターネットとはそういうものだと思います。

橋爪 私は、人間に語学の学習負担を増やす方向で解決してほしくないんです。

西 でも、ヨーロッパなら、今でも数カ国語ぐらいは話す人が多いですよ。

橋爪 日本語にはルビという制度がありますよね。それから、歌舞伎の外題などはその先を行って、例えば「青砥稿花紅彩画」みたいに、漢字があつて、漢字の意味は分かつて、隣にそれと似たような、似ていないような平仮名が書いてある。つまり、両方意味を持っているわけ

橋爪 日本の利点は、アメリカではないことなんです。戦後の発展は、アメリカではないことによってアメリカに食らいついて最大限にその利点を追求したことにあると考えるのではないか。今、アメリカは新しい利点を手に入れていきますね。だから、日本がそこで生き残ろうとするならば、やはりまたアメリカではないという利点を最大限に活かさないといけないだろう。

つまり、日本は、文化伝統が英語ベースではないというところをインターネットの環境を改善するための最大の利点とするわけです。アメリカ人には、英語を使うのが不便だという感覚はありませんからね。

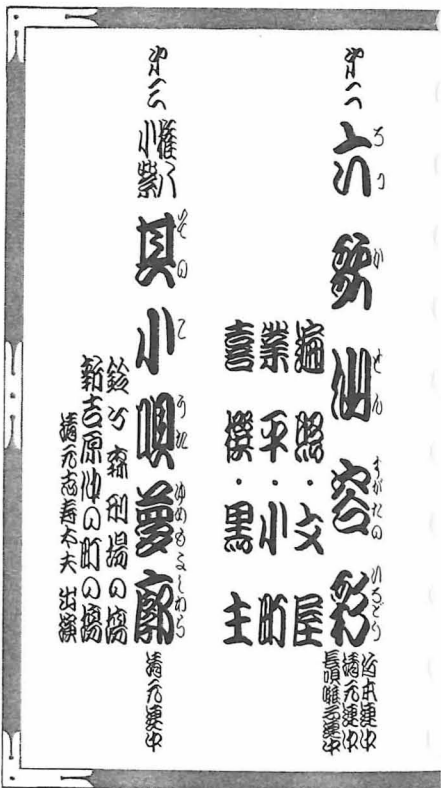
西 その辺が、これからの日本の一つの突破口になるかもしれないですね。

橋爪 そうです。そうしたソフトの開発に、最大限の投資をする。

西 そうですね。それは面白いと思います。

最近、技術的な予測とか、そんな話題ばかりなんです。それだけでももったいない。私は、今日のお話のように、人間の生き方はどうなっていくのかということ、つまり「哲学」についてもっとお話ししたいと思っていました。

橋爪 私にとってはやや予想外の展開になった対談でしたが、それでかえって面白かったです。こちらこそありがとうございました。



歌舞伎の外題